

村松繁樹著

## 日本集落地理の研究

藤岡謙二郎

村松教授の本書に収録された十一編の諸論文をくりひろげると、その或物はかつて評者が大学院の学生時代に感激をもって読んだものから、最近年では幾分生意気な批判的態度で読んだものなどいずれもなつかしい感想でみたされる。かつて日本の「聚落」——岩波講座「地理学」所収、昭和八年——をミルケのドイツの集落 (Mirke, Das Deutsche Dorf) に負けじと物された著者の若き日の学的情熱を知る者には、「はしがき」で述べられている文句も意義なしとしない。すなわち「大学卒業の後も大和や礪波平野の集落研究に従事したけれども、一方集落地理学の体系的なまとめをも試み、昭和五年の夏、京都府教育会主催で地理学講習会があったとき集落地理学について講じたし、昭和七年地人書館から地理講座が刊行されたとき、これを基にして集落地理学を、また同九年岩波書店版、地理学講座中にも、その一分冊として集落なる一篇をものした」なる行列である。

それから三十年後の総括は本書の第十一章「日本村落の特質」で述べられているようにも思われる。この一章は既発表の教授のいう事例研究の諸論文への体系化といってもよく、三十年前の教授の

「体系的なまとめ」とはおのずから趣きを異にし、理論としてではなく実践を通じて得られた所論であることが知られる。ただそのような三十年のまとめ——評者をしていわしむれば、これこそ学窓卒業直後の仮り物よりも体系版だといいたいのであるが——にしては、一寸頁数がすくなく、本書の結論とするにはやや軽い印象をうけるのである。そしてそのためには第十章の「日本村落の形態」なる著者が若き日に『地理論叢』にもおされた論文をもって補はなければならない歯がゆさを感じるというのが卒直な本書の読後感である。

それよりも何よりも本書は著者の三十年にわたる日本の集落地理研究の論文集そのものであると紹介した方がより適切であるかもしれない。以下この終章からその内容をみて行こう。

ここで著者は集落地理学研究において近年都市への人口集中や町村合併による新市の誕生による都市研究は盛んだけれども依然として市域中に多くの自然村を包括し、都市と村落との関係が分離さるべきではなく、地理学における村落研究の重要性を強調する。すなわち「行政上の区域は村落が近代的機能をなす必要から、時代の経過によってすでに広域に拡がってきたのであったが、しかしながら、この範囲がいかにように変化してきても、地方における實際生活のユニットは、常に、自然発生村落ともいふべき江戸時代のムラ、すなわち部落、大体において今日いうところの大字であったことは、否定できぬところであろう」と述べて現在ではむしろ都市に関心をもち著者の過去における村落研究の立場を十章までの事例研究をおげながらジャスティファイしていることが先ず注目される。市域に

おける大字行政の意義についてのべるのである。ついで著者はこの大字の活動が何に胚胎するものであるかを追跡する。これらのムラは封建社会の秩序として連帯責任を負わされたことから農業協同体をなし、さらに集村の多いことを述べる。さらに「ここに注意すべきことは、たとえ部落実行組合そのものは近代的なものであるにせよ、ムラの諸慣行やさまざまな掟などが部落実行組合の中に持ち込まれることになり、ムラの機能の相当な部分を部落実行組合で肩替りし、部落実行組合がムラの諸慣行を温存してきたものと考えられる点である」として部落実行組合の諸事業を分析する。その研究態度は地理学的であり、社会学へも並々な関心を向ける。けれどもこれのみでは日本集落への著者の広い見方が網羅されているわけではない。そこで第十章「日本村落の形態」を見てみよう。

もとの一文は『地理論叢』第一輯（昭和七年）に「本邦田園村落の形態に関する一考察」として発表したものをこのたび補訂したもので新しい引用文献が注目される。文化現象の諸景観は、地域的生活の差異をあらわすメルクマールでもあるの文句のごとく、第十一章が比較的社会的観点が強いのに対して、本章には景観的ないはは形態的考察が多い。

日本の地形や気候的特質と集落立地の条件をのべ、しかもそれらが村落の集村や散村形態にも影響するとする。相異なる地層が湧水線に沿って発達するもの、武蔵野や南九州のシラス台地等乏水地域の村落や、水の過剰な低湿地での自然堤防や微高地利用の集落など、水利と耕地並びに村落居住形態との関係の深さを日本各地に例をあげながら説明する。而してヨーロッパの村落と比較して「ただ大き

な相違はヨーロッパにあつては気候冷涼土地瘠薄の、広い空間的拡がりによつて促される牧畜経済への傾向が強いのに對して、日射と雨の多いわが国では稲作中心の傾向を示している点である」として稲作村落における集村や散村の色々のケースを述べる。また「集村と散村のうち、いずれが基本的な形態であろうか。……それらは、異なつた局地的条件によつて示された、基本的な二つの形態であると考えねばならないであろうか。それについてはいまお明らかではないが……集合は人間の根元的な足どりであろうし、古代の血縁的構成体は、村落という最初の共同体の骨組であろう。分散でなく集合といふことは居住の最初の段階であろうと思われる」とのべて本書中著者が最も関心をもつ散村と集村論を概括する。而してわが国における散村は、水平的には東北・北海道のように、気候が寒冷で開拓の遅れた土地に向うほど、垂直的には九州・四国・中国にみるように、比較的暖地において山地に向うほど卓越している。……散村の分布は、概ね扇状地、火山灰台地、氾濫原など農業的条件に恵まれなかつた地域に分布している」なども著者の広い視野からする総括論であろう。散村と集村の問題は著者等が日本の集落について問題にする前、既にブラーシユの高弟ドクマンジョンが一九二五年カイトで開催された国際地理学会議で取りあげ、ひろく世界の地理学界に訴えたところである。——本書の諸論参照——この場合その新古や地域的類型を一言で要約出来ないところに村落の地理的研究の困難と妙味があるともいえようか。第十章でもまた著者は自然的な問題だけではなく、豊富な資料をも用いて、一方には村落居住形態における農業経営の差をも述べるが決定的な結論は簡条書的に

は要約されてはいない。

以上の二篇の論文に対する著者のいう事例研究は第一章の「大和平野」からはじまって第九章の「北海道の村落型」に到るまでの諸論文となる。第二章「美濃波多新田」第三章「高知平野の集落」第四章「太田川の沖積作用と集落の発達」第五章「五箇山平村」第六章「崎志摩の漁村」第七章「礪波平野」第八章「手取川扇状地の村落居住形態」等がそれで、地域的には日本全域に及び、日本村落のさまざまな型を代表するものである。中には山村あり漁村あり、扇状地や氾濫原に位置する村落があり、さらに人為的計画的な新田集落や開拓村落も一通りは収録されている。とりわけ大和平野と礪波平野の村落研究の論文は、その調査の回数を重ねること多く、対象として取り上げた地域も広く、本書中で著者が最も力を入れた部分であるが、他のいづれの論文もかつて学術雑誌に一度発表され批判を得たものに部分的に補訂を試みたものである。まず第一章の大和平野から見てゆこう。ここは「垣内式村落」、「垣内考」、「環濠集落」、「二階堂村」の四節から成る。三節までが著者が日本集落地理学史の重要問題として小川琢治、牧野信之助以来論争のたえないいわゆる大和の環濠集落に対する私見を開陳したものである。ここで二階堂部落を問題にしたのは町村制施行以後行政村として統一されても、村落生活の実際は大字が有力な単位として重要な意義をもつことをのべ、条里地割に基礎をおく平地の村が、宮座を中心として結ばれ、農業実行組合により結ばれることを述べる。さらにこの村の大きな悩みが洪水であり、吉田部落にみるような低湿による二毛作不能地域も存在するとして、干ばつと洪水が盆地の村々の宿命であ

ることになる。結局この現存の奈良盆地における村落生活の実態から、従来論争されてきた環濠集落論を解こうとするかに見える。すなわち「かくて環濠集落の問題もそれぞれの地域の観点からもみたいのである」と第三節で結論する。教授は第十四図で慶長四年の東井戸堂部落の水害古地図を掲載し、「防禦的必要のなくなった時代に、しかも土地のもっとも集約的に利用されているこれらの地域に、なお敵として残存することは、濠の有した機能が灌漑ないし排水あるいは遊水池ないし貯水池としての役割であったことを考えしめるものである」とする。乾燥と洪水といった奈良盆地の地域性の中に環濠集落を理解せんとするのであり、環濠集落といったものの中には年代的には新しい時代のももふくまれることや、氾の消滅過程は河川の修築と、その後の土地利用の集約化に伴うこと等を述べる。しかしこの間にあつて条里起源を主張する小川説や中世起源を主張する牧野説そのものの批判はみられず、結局教授の環濠集落観は従来の人々が問題とした起源のことにはふれず、現状を歴史的、地域的に観察せんと試みたところに特色があるといえようか。従つてこれをもって従来から問題とされている核心からは一部それている感じもしないではない。すなわちここで古代及び中世における濠と灌漑及び洪水の問題にもふれてもらえば、この長文の第一章の価値も更に深みを加えたであろう。それはともかくかつて同じ研究に従事した評者の夢は将来全国の環濠集落について、その年代別の分布図を作成してみることにある。各年代の入りまじつたものを機能別に分類することの方が実は案外イージーなのであるから。

つきに第二章では伊賀の名張盆地と阿保盆地とを分ける洪積台地

の開拓と新田の開発を取扱ったもの。承応三年、藤堂藩によって開墾計画のたてられた美濃波多新田について、豊富な古文書を用いて、その水田としての開墾事業の綿密さを述べたもので、林野に線状に開拓された列状村、その背後をとりまく短冊形耕地、それらに貫通する三里二町に及ぶ井溝水路の具合がドイツの *Waldhufendorf* に類似するさまを紹介し、番水のこと等にもふれた初期の著者の研究である。同じような開拓村落型をまた著者は新開地北海道の場合に求めた。ここではもとより集団移民のそれである。幕府の蝦夷地の警衛、開拓からはじまって、明治後の土族授産の一環としての土地開発から屯田兵村の成立に及ぶ。さらに「この集居も入植当時……はよかったが、……ほほ給与地の開墾が完成したころから、各兵村は耕地への通作の不便を痛嘆……しだいに兵屋を耕地の中に移転する者が相つき、二次的に分散することとなった」としてここでも制度としての集村から散村形成の事情に注目する。著者はさらに近年試みられているパイロットファームのことなどにもふれるが、新開農村において各地からの生活環境を異にした移住者を一ヶ所に集中さすことの是非をも論じる。

第三章の高知平野、第四章の太田川流域の集落に関する論文が、集落とはいいながらも、対象地域が広汎なため地誌的研究の傾向が強くやや平盤的であるのに対して、第六章はインテンシブな研究である。崎志摩の漁村の変容をのべて既往の著者の農村研究とは別な香りをただよわせる。とりわけこの半島の戦後における人口の増加をのべ、真珠養殖業者や遠洋漁業の資本家の出現による漁村の階層分化を述べ、依然として零細である海女の生活や耕地のことにふれ

る。中でも和具町を例にあげて、明治五年の壬申籍を分析したり、大正末期及び現在の職業別人口を比較して、この漁村の交通機関の発達に伴う近代化の様子を述べているのが注目される。

最後に本書中約三分の一たらずの頁数がさかれた第七章の礪波平野の研究をみてみよう。節を分つこと五、礪波平野の村落景観、礪波散村の問題点、散村の起原、宅地・耕地と道路、鷹栖村から成るいずれも散村論に中心がある。ほかに第五章の五箇山村は庄川上流におけるダム開設に伴う山村の変貌をのべたもの、第八章は手取川扇状地の村落居住形態を取扱ったもので、ともに礪波平野に近い地域であるが、一は山村、他は扇状地の集落という意味で章を独立させたものと思われる。さて富山県の西部、庄川・小矢部川の下流域に展開する礪波平野の散村形式についても小川琢治以後多くの学者の注目したところであり、著者もまた昭和六年に「歴史と地理」に散居制を論じ、同八年に本章第一節に収録の村落景観を「地理論叢」に発表して学界に名をなした。戦後再び著者が大阪市立大学の地理学教室を主宰するに及んで度重なる実地調査の結果その研究が深められたものである。戦前の著者の研究が景観論的立場にたっていたのに対し、戦後のそれが耕地と結びついた村落の経済地理的分析にぐい入っているのはともにも共同調査を行った研究室の若い学者等の刺戟もあったのではないかと考えられる。網状の灌漑溝渠の通じた一面に展開される屋敷森でかこまれた孤立荘宅群にたち入って個々の宅地における盛土や間取り、屋根型、さては用水等外観的注意の眼を、さらに起源に求める。小川琢治が奈良時代の開墾とし、牧野信之助が藩政時代に溯ることは不可能とする先学説を共に否定し

て、加賀藩の領内で、いわばお膝下であつた加賀や能登には……存在せず……越中の特殊な地域にだけ行なわれた……了解に苦しむ……とし、環濠集落の場合と同様な筆法をむける。また同じ礪波でもよく見ると、庄川の水を受ける地域、とりわけ旧河道を利用して水路に灌漑され、多くは底土が砂礫質かなる乾田地域に限られ……とし、さらに「各民家は自給的色彩の濃厚な農業経営にもっとも都合のよい散居村落……」通耕距離の短縮によって労働力の節約をはかる……とし、ここでも万延元年（一八六〇）の古文書を引用し、旧不動島村の場合について「手違い所は小作させて、居屋敷の近くを請作しても耕作しようとする関係は谷細農民の場合も同様である」と述べる。福野や出町の市場町の発生も牧野のとなえた荒蕪地開拓の基地としてではなく、自然発生的だと別の文書から解く。屋敷森についても居館地を防禦するためのものでなく、フニンによる火災の防止とする小川説にかたにする。結局教授の散居論は牧野説の反ばくに終るが、さればとて教授の例証のみでも一つの仮説とすべき点が皆無ではなく、この場合評者にはとくに日本他地域の散居に対する教授の所論をたとい註の形に於いてでも展開させてほしかった。ただ宅地、耕地と道路なる節において新しく通耕及び運搬の問題を取りあげ、厩栖村に例をあげて、遠い耕地でも歩いて二、三分ないし五分、家畜も耕作と厩肥をとるためのものであり、一般に扇状地面では耕作道以外には道路の発達しないことをのべる。また方言においても村落生活の孤立性に注意をむける。さらに加賀藩の「改作法」により耕地の交換分合が行われても、実施においてはより合理的に行われ、分家成立の場合にも本家より遠

かく地に分散したことを述べる。この場合も例えば同じく散村を構成する老岐島において「くじ持ち」が強行されて耕地が分散しているのと、どのように異なるのかといった比較説明がほしかった。

頁数の関係で紹介はこれで終る。本書の特色は内容が極めて豊富で論旨を説明する事項に関する例証が多すぎることに。そのため読者にはややもすれば肝心のポイントがわからなくなって了うことがある。ということは本書は著者の永年にわたる貴い実地調査のたまものだからであり、長所でもあり欠所でもあるように思える。運歴が近づいても若者に負けじとフィールドノートに何でも書きつけられる学究であり努力家である著者の尊い姿が評者の眼には浮かぶのである。ただかつて著者の教示をうけた一人として、卒直な説後感を許されるならば、あくまでも人文地理学者らしいその帰納的な実証研究を、その美辞麗句をならべた文章だけにではなく、もっともっと地図化してほしかったと思う。例えば礪波の散村にせよ、大和の環濠にせよ、その新旧や耕地との関係、潰廃の様子など、もっと著者の所説が明らかになったのではないかと思う。それと戦後の論放にあって、共同調査の形でなされた他の人々の同じ地域に対する調査の考え方や、その間にあって著者が長としてなされた村落の総合調査の意義づけをも、結論とどこかにしるべきであつたかとも思う。戦前戦後を通じて同じ対象をたゆまず一貫して研究されて来た先学としてこれからの同じ道を歩む若い学徒へ残さるべき別な教訓ではないかと思うからである。さあれA5版四二二頁に及ぶこの研究論著は読む者をして人文社会系学問研究の深く且つ地道なることを感ぜしめる。

(A5判四二二頁 昭和三七年一月ミネルヴァ書房刊一五〇〇円)